

Workshop on Workshop 2008

体験型講座の効用を披露

頭と体、両者を活用

子どもの自己表現促進も



左から吉野氏、平田氏、荻宿氏。それぞれの立場からワークショップについて議論を交わした

本学福武ホールにおいて九日、二〇〇九年度から青山学院大学と大阪大学で実施される「ワークショップデザイナー養成プログラム」を受け、両大学関係者の報告会が開かれた。「Workshop on Workshop 2008」ワークショップの意味と仕組みを考えるワークショップ

「ワークショップ」(主催・NPO法人学習環境デザイン工房)と題する同報告の、第一部はワークショップの公共性を考えるパネルディスカッションが、第二部では実際に来場者をグループに分けてのワークショップ体験が行われた。

パネルディスカッションは劇作家の平田オリザ氏、学習環境デザイン工房代表の荻宿俊文氏、ワークショップコーディネーターの吉野さつき氏で行われ、教育におけるワークショップの可能性やグループ同士のネットワークづくりの意義、今後の人材育成など活発な意見が交わされた。荻宿氏は「学習意欲の失せてしまっている子供たちに、

自分の考えを外に出させてあげることができる。知識

だけではなく、学習は参加していくもの」とワークショップの効果を語った。第二部のワークショップ

参加者はそれぞれが、思い切り体を動かす機会を得て楽しんでいた。ワークショップでは、来場者がワークショップに参加する側と見る側に分かれ、身体での体験と解説による頭での理解の両面で効果を実感した。具体的には、コミュニ

ケーションを基盤とした知識や技能を活用するプログラムの企画運営を行う。家庭や学校ではなく地域を舞台として、専門家と一般市民の間などにコミュニケーションや共同で活動する機会などを提供する。